

2015年2月4日
株式会社ストラトスフィア

ストラトスフィア、ディザスタリカバリ対策や負荷分散に最適な 「Stratosphere SDN Platform 2.0」を提供開始

株式会社ストラトスフィア(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:浅羽 登志也、以下ストラトスフィア)は、クラウドサービスやデータセンター運用業務を効率化するネットワーク仮想化プラットフォーム製品「Stratosphere SDN Platform」の機能を拡充し、ディザスタリカバリ(DR)対策や負荷分散に適した「Stratosphere SDN Platform 2.0 (以下、SSP 2.0)」を2015年1月末より提供開始しました。

「SSP 2.0」では、新たに以下の機能を追加しています。

1. 通信路最適化機能(トロンボーン現象改善機能)
2. リダイレクト機能

1. 通信路最適化機能

事業継続性を向上させるための DR 対策のひとつとして、災害発生エリアのデータセンターから別のデータセンターへ、仮想マシン(Virtual Machine: VM)を動作させたまま移動させる「ライブマイグレーション」により、ユーザへのサービス提供を継続させる方法があります。この場合、次のような課題が考えられます。

課題 :ライブマイグレーション時には、VM への通信セッションを保持する必要があり、移動の前後で IP アドレスは変えられません。そのため、両データセンター間に仮想的な L2 ネットワークを構築し、移動を同一のセグメント内で行う必要があります。また、そうしたデータセンター間を跨がるライブマイグレーションでは、移動後にVMが通信をする際に、同一データセンター内ではなく、移動前のデータセンターにある中継機器(デフォルトゲートウェイ)を経由してトラフィックが行って戻ってくる現象(トロンボーン現象)が発生してしまいます。

SSP 2.0では、L2トンネル機能でデータセンター間にL2ネットワークを構築し、通信経路を最適化する機能によって、これらの課題を解決します。本機能は、データセンター拠点の新設や統廃合時のVM移行にも同様に適用できます。

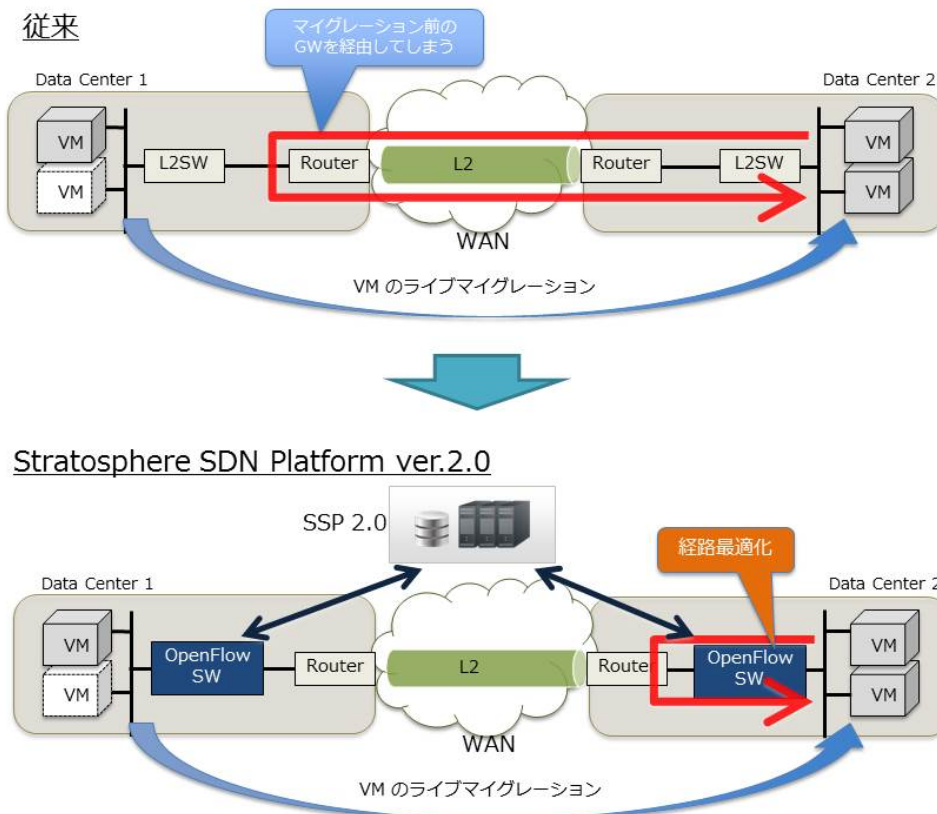


図1：ライブマイグレーション時の課題解決

2. リダイレクト機能

データセンター間での負荷分散やバックアップ/ステージング環境構築などを目的として、地理的に離れた複数のデータセンターに置かれたシステムを相互待機型 (Active-Active) で稼働させる場合があります。その際には、次の課題が考えられます。

課題：使用するサービスがどこのデータセンターのどの VM で動作しているかをユーザに意識させないように、複数の VM に同一の IP アドレスを付与する必要があります。そのうえで、同一 IP アドレスを持つ VM への通信がある際に、適切な VM に振り分ける必要があります。

SSP 2.0 では、ユーザからのアクセスごとに適切な VM に通信させるリダイレクト機能により、この課題を解決し、クラウドサービス利用やデータセンター運用を効率化します。

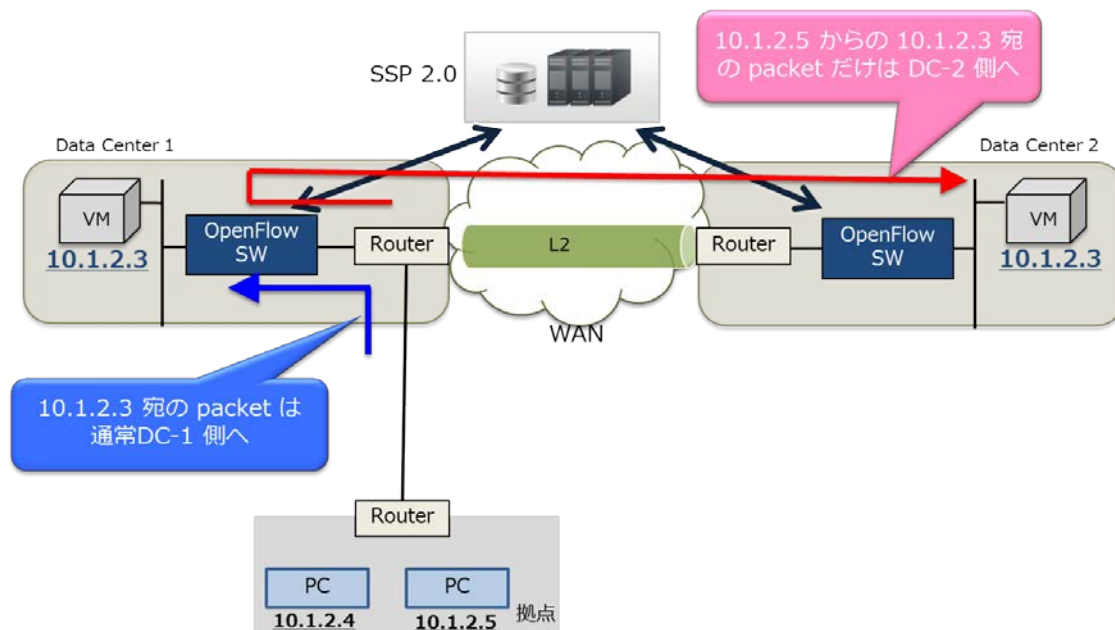


図 2 : Active-Active で稼働させる場合の課題解決

ストラトスフィアは、今後、クラウドやデータセンターだけではなく、通信ネットワーク全般および企業内ネットワークにもネットワーク仮想化の領域を広げ、様々なシーンで、NaaS (Network as a Service) を実現するソフトウェアプラットフォームの提供を目指してまいります。

■ストラトスフィアについて

株式会社インターネットイニシアティブと株式会社 ACCESS の合併会社として2012年4月5日に設立され、次世代クラウド環境に最適なプラットフォームの構築を目的として、SDN を実現するソフトウェアの研究開発を推進しています。

<http://www.stratosphere.co.jp/>

報道関係お問い合わせ先

株式会社インターネットイニシアティブ 広報部 増田、荒井

TEL: 03-5205-6310 FAX: 03-5205-6377

E-mail: press@iij.ad.jp URL: <http://www.iij.ad.jp/>

株式会社 ACCESS 広報 半澤

TEL: 043-212-2230 FAX: 043-212-3234

E-mail: prinfo-gr@access-company.com URL: <http://www.access-company.com/>